

かわら  
○川巴良諏訪神社

市内川原地区の信仰を集める、川巴良諏訪神社の春季例祭にも母衣武者行列が行われていました。その起源は定かではありませんが、明治2年（1869）にそれまで兼務社であった高岡関野神社から宮司が分家したので、その前後からとも考えられています。

昭和38年までは氏子8ヶ町の旅籠・風呂屋・上川原・中川原・檜物屋・川原上・二丁・一番新からそれぞれ母衣武者を出していたようですが、現在では毎年5月10日の祭礼日に各町内で飾りつけられるのみとなっています。また平成2年、二番新町でも母衣武者道具一式が再発見され、飾りつけられています。

この母衣武者はそれぞれ前田利家・源義経・上杉謙信・徳川家康など名将の名を戴いているのが特徴的です。



川巴良諏訪神社春季例大祭 昭和37年



なか がわら まち  
中川原町



かみ がわら まち  
上川原町



かわら かみ ちよう  
川原上町



いち ばん しん まち  
一番新町



にしん まち  
二丁町



ひの もの まち  
檜物屋町



一番新町 母衣宿にて 昭和43年頃



にしん まち  
二番新町



檜物屋町 母衣宿にて 昭和20年代頃

博物館ノート(B)

ほ ろ  
母衣武者行列

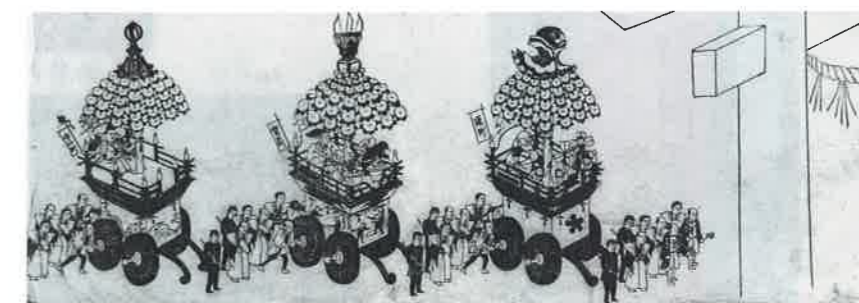
高岡市立博物館

「母衣」とは竹籠などでふくらませた布のことで、騎馬武者が背負い、後方からの矢よけなどにした指物の一種です。戦国時代、母衣を着用して大将に近侍し、伝令などに戦場を駆けめぐった「母衣（掛）武者」は、軍団のエリート集団でした。

高岡母衣武者行列の起源は明らかではありませんが、高岡御車山の行列次第が記録された「御祭礼行列調理帳」（『高岡市史』中巻P371）によると、遅くとも享保元年（1716）にはその存在が確認できます。次いで宝暦13年（1763）の「正一位関野神社／正一位加久弥神社／御祭禮行列」（高岡市立中央図書館蔵）にも6町内が「幌懸武者」を出していることが見いだせます。しかし、この2点の史料はいずれも文字史料でありその実像は不明でしたが、明治16年（1883）の「越中国高岡／関野神社祭礼繁昌略図付録」という木版画には8人の母衣武者が神輿・御車山を先導している様子が描かれており、往時の祭礼の賑やかな様子がよくわかります。

この高岡関野神社の母衣武者の外にも、市内の大木白山社と川巴良諏訪神社の祭礼においても母衣武者行列が行われていました。両神社とも高岡関野神社の母衣武者に影響を受けて始まったと思われるのですが、詳しくは分かっていません。

曳山や神輿を先導し、祭りを盛り上げていたこれらの母衣武者行列は、やがて分離独立して、母衣武者のみの行列となり、昭和3、40年代頃まで行われていました。現在でも、祭礼当日には各氏子町内の「母衣宿」において母衣（甲冑）とともに大小の纏、旗、法被などが飾られて、曳山や神輿を迎えています。



越中国 関野神社祭礼繁昌略図 付録  
明治16年(1883) 当館蔵

## ○高岡関野神社

絢爛豪華な曳山で有名な高岡御車山祭りは、高岡関野神社の春季例祭（5月1日）です。

山町（御車山などを持つ10町内）とは別に、時代により数の増減はありましたが、現在では博勞町・元町・梶原町・平米町・宮脇町一丁目の5町内が母衣（甲冑）・大小の纏などを母衣宿で飾り、御車山を迎えています。鴨島町の大旗は以前は行列を先導していましたが、現在は町内に立てられています。

史料によると江戸時代には上記の町内以外にも、利屋町・白銀町・片原横町・鴨島町などの母衣武者が大小の纏、床几持ち（小姓）などを従え、行列にも参加していたようです。



博勞町



元町



平米町



白銀町



鴨島町 猩々緋大旗



宮脇町一丁目



梶原町 母衣宿にて 大正～昭和初期頃

## ○大木白山社

高岡市内下関地区の鎮守である、大木白山社の春季例祭は毎年5月16日に行われています。

以前は氏子各町内が母衣武者を仕立て、神輿を先導していたようですが、現在では大鋸屋町、大工町、大工中町、鉄砲町・白銀後町（昭和期に分離し、一体で活動している）の5町内が母衣武者装束一式を母衣宿に飾りつけ、神輿を迎えています。



大木白山社春季例祭 明治～大正初期頃



鉄砲町・白銀町



復活した鉄砲町の母衣武者行列 平成9年



大鋸屋町



大工町



大工中町



大工中町  
ビロード包白糸威六枚胴具足